

Johnson, R. Burke, and Anthony J. Onwuegbuzie. 2004. "Mixed Methods Research: A Research Paradigm Whose Time Has Come." *Educational Researcher* 33(7):14–26.

(ジョンソン&オンビュグブジー、「混合研究法——研究パラダイムの時代の到来」)

### はじめに (pp.14-15)

- ・ 量的研究と質的研究のパラダイムの提唱者達による 1 世紀以上にわたる論争
  - 量的研究側
    - ・ 実証主義への依拠
    - ・ 社会観察は物理現象の観察と同様に行われるべき
    - ・ 教育研究はバイアスを排除し、仮説検証を行い、一般化を目指すべき
  - 質的研究側 (構築主義者や解釈主義者とも呼ばれる)
    - ・ 構築主義、観念論、相対主義、ポストモダニズムへの依拠
    - ・ 知識が社会的文脈に依存することの強調
    - ・ 教育研究は、文脈についての詳細で、豊かな記述を心がけるべき
- ・ この 2 つの対立は解決不可能に見えるが、3 つ目の研究パラダイムとして混合研究法を位置づける
  - 混合研究法の目的は、量的・質的双方の長所を活かし、短所を最小限に抑えること

### 伝統的なパラダイムの共通性 (p.15)

- ・ 差異が強調されてきた量的・質的研究には共通性もある
  - 問いに答えるために経験的観察を用い、信頼性の欠如への対応に取り組んでいること (Sechrest and Sidani 1995)
  - 研究の目的が、人間とその生活や社会についての正統な主張を提供しようとしていること (Dzurec and Abraham 1993)
- ・ 現在の教育研究においては、認識論的・方法論的な多元性が浸透している。多くの研究者は多元的な認識論・方法論を組み合わせて、より正確に研究課題に答えることに取り組むべきである。

### 哲学的な問題の議論 (pp. 15–16)

- ・ 量的／質的な議論を対立させる議論の中には、認識論 (epistemology) と方法 (method)

を同義語に扱う傾向があるものもある。しかし、認識論の重要な側面である、正当化の論理 (the logic of justification) は、研究者の方法を規定しない。

- 例えば、質的研究者が、典型的な量的研究者が行うデータ収集法を利用することは妨げられないし、その逆もしかりである。
  
- 量的／質的研究それぞれの純粋主義者 (purists) の主張は誤りがある
  - 量的研究者：完全に客観的なバイアスから逃れた測定を理想としているが、研究の過程においてそれらが入り込むことを避けるのは不可能である。
  - 質的研究者；強い相対主義や構築主義を主張するが、これは論理的に反論され、研究の質を判断するための体系的な基準の開発や利用を妨げる。
  
- 幸いなことに、多くの質的研究者と量的研究者は、現在、以下のいくつかの主要な哲学的ポイントについて基本的な合意に達している。
  - (a). 「理性の光 (light of reason)」の相対性 (見えるものは人によって異なる)
  - (b). 知覚や事実の観察には理論の影響があること
  - (c). 一つの経験的データに適合的な理論は一つ以上あることが可能である
  - (d). Quine のテーゼまたは補助的仮定 (auxiliary assumptions) の共有 (ある仮説のテストには様々な仮定を含むため単独で完全なテストを行うことは出来ない。代替的な説明が常に存在すること)
  - (e). 帰納法的前提に立つことの共有 (経験的研究は演繹法的前提に立つには、問題のある証拠しか得られないため)
  - (f). 研究活動の社会性 (研究者がコミュニティに組み込まれていること、研究者の態度、価値観、信念が明確であり、その影響を受けていること)。
  - (g). 価値の不自由性

### 混合研究法の哲学的パートナーとしてのプラグマティズム (pp. 16-17)

- 混合法研究は、定性的および定量的研究によって得られた洞察を、実行可能な解決策に適合させることを試みる方法および哲学を用いるべきである。
  - 著者らは、古典的なプラグマティズムのプラグマティックな方法の考察を提唱する。プラグマティックでバランスのとれた、あるいは多元的な立場をとることは、異なるパラダイムの研究者が知識を前進させようとする際のコミュニケーションの改善に役立つ。
- プラグマティックなルールや方法は、経験的にそれが真であるかが確かめられるべきである (James 1995)。
  - ある考えを判断する際には、その経験的な事象を考慮する必要がある。現実世界の現象をより良く理解するのに役立つように、実際の結果や経験的なデータを調べるべき

である。(Dewey)

—そのため研究の問いに合わせて適切なアプローチを組みわせるべきである。

- ・ プラグマティズムの議論は、行動に基づいた実践的で結果を重視した研究方法を提供してくれる
- 教育に関して言えば、様々な種類の生徒のための効果的な指導法の発見などの明示的な価値観を重視したアプローチをとる。

### 質的・量的・混合研究法の比較 (pp. 17-19)

- ・ 混合研究とは、研究者が量的・質的研究の技法、方法、アプローチを組み合わせて一つの研究とすることを指す。
- 混合研究法は、研究者の選択を制限したり制約したりするのではなく、研究の質問に答えるために複数のアプローチを使用することを正当化する試みでもある。
- ・ 研究を効果的に混合させるためには、質的、量的双方の方法論的伝統に習熟する必要がある。
- Johnson and Turner(2003) : 混合研究法の原則は、研究者は異なる戦略やアプローチを組み合わせる際には、方法間で補完的な強みが得られる場合にのみ行うべきである。

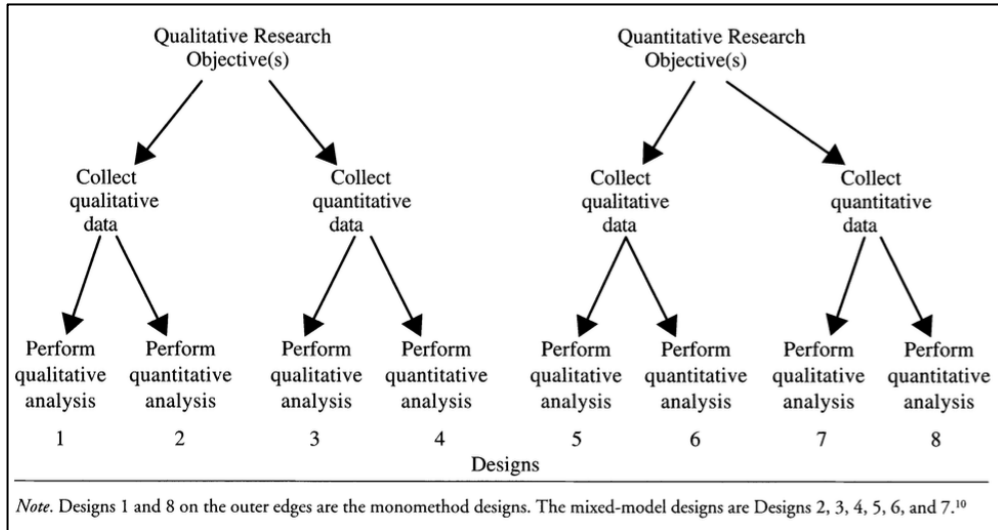
### 混合研究法のタイポロジーの開発 (pp19-20)

- ・ 上記のそれぞれの利点と欠点を踏まえて、著者らが示す混合研究法の類型は、これまで出されてきた類型も踏まえて検討しているものである。
- 著者らが強調するのは、混合研究法を研究設計（問いの設定、データの収集等）のどこでデザインに盛り込むかということのパターンが多様であり得るという点である。
- また、研究には、批判理論／変革的な解放アプローチを取り入れるのか、それとも明示的な価値を志向しないのかといったパターンも有りうる
- これらの点をふまえると混合研究法のデザインはほぼ無限にあり得る

混合研究法の類型化に向けて (p. 20)

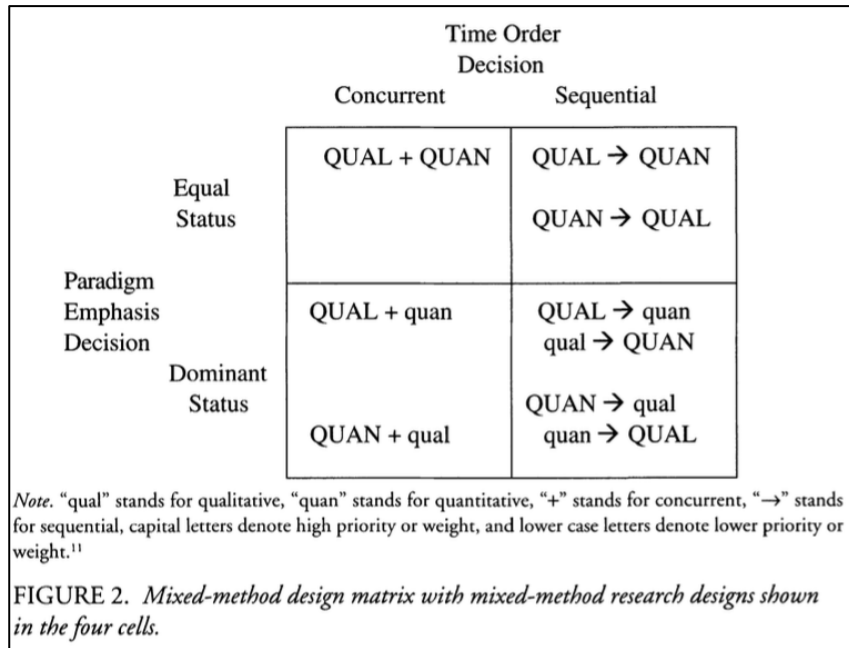
- ・ 混合研究のデザインの大部分は【混合モデル mixed-model】と【混合方法 mixed-method】の2つの大きなタイプから考えられてきた。
- ― 【混合モデル】について (図 1) : 研究プロセスの段階を超えて混合が行われる

図 1 混合モデルについての図解



- ― 【混合方法】について (図 2) : 混合方法の決定には次の2つ主要な決定が含まれる。
  - ・ ① : 研究の大部分を一つのパラダイムに依拠したいか、そうではないか
  - ・ ② : 各段階を同時並行的に実施したいのか順次実施したいのか

図 2 混合方法についての図解

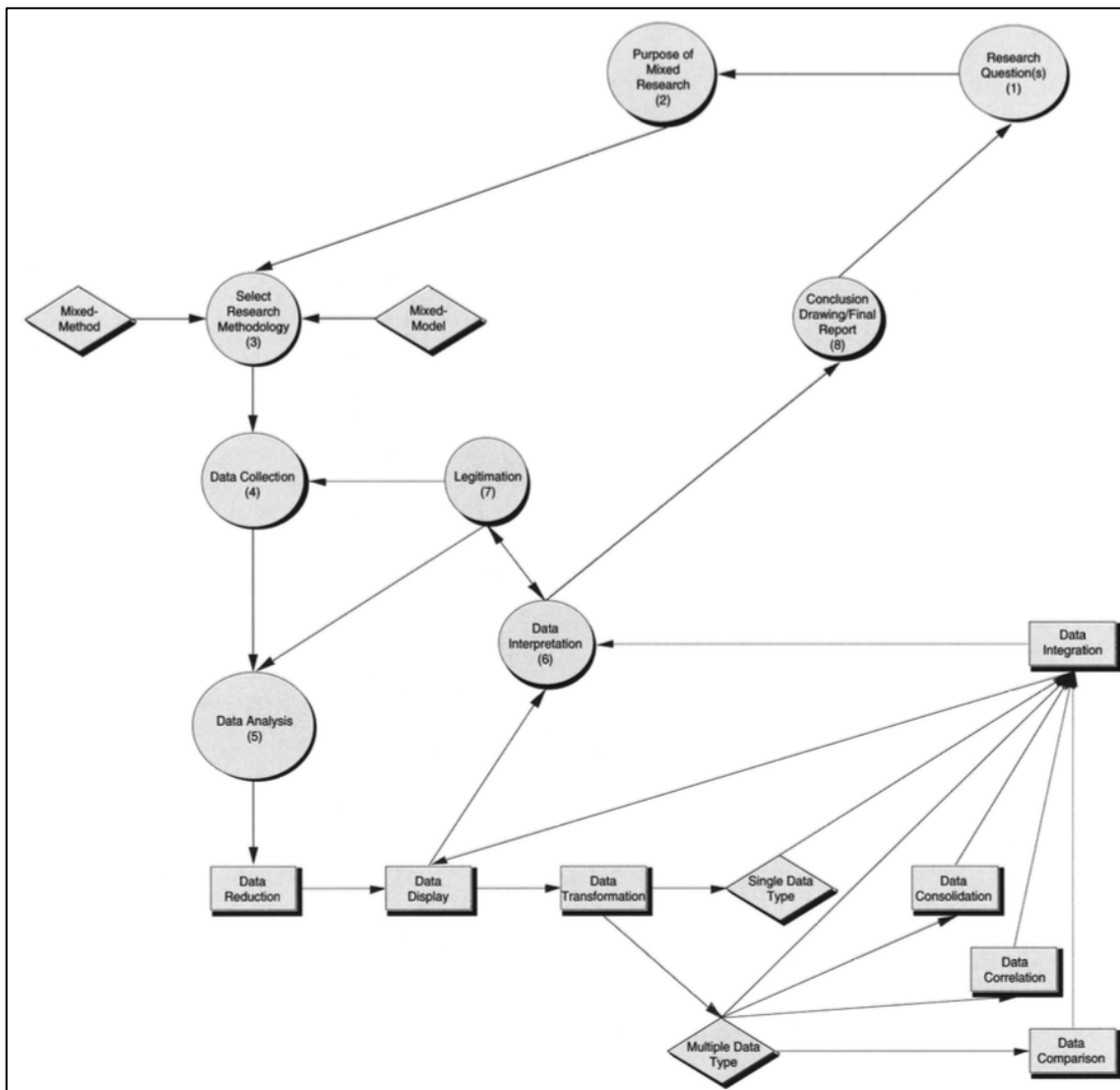


- ・上記の2つのモデルよりも複雑で研究者の実践に即したモデルを作ることが可能である。

### 混合研究法プロセスモデル (pp. 21-22)

- ・ 著者らの混合法研究プロセスモデルは、8つの明確なステップから構成される
  - (1) 研究課題の決定
  - (2) 混合研究が適切かどうかの判断
  - (3) 混合方法または混合モデルの研究デザインの選択
  - (4) データを収集する
  - (5) データを分析する
  - (6) データを解釈する
  - (7) データの正当化 (legitimate)
  - (8) 結論を出し、最終報告書を書く
- ・ 混合研究は、目的と1つ以上の研究質問から始まるが、残りのステップは順序を変えることができ、質問や目的も必要に応じて修正することができる。
  - 混合研究には循環的、再帰的、相互作用的なプロセスが含まれている (図3)
  - また、再帰は単一の研究の中で行われることもあれば、将来の研究に情報を提供したり、新たな研究目的や質問に結びつけたりすることで、関連する研究を横断して行われることもある。
- ・ 混合研究法プロセスモデルのデータ分析(5)にはさらに次の7つのステップが含まれている。
  - (a) 単純化(reduction)
  - (b) 表示(display)
  - (c) 変換(transformation)
  - (d) 相関関係(correlation)
  - (e) 連結(consolidation)
  - (f) 比較 (comparison)
  - (g) 統合(integration)

図3 混合研究法プロセスモデル



### 教育における混合研究法の今後 (pp. 22-24)

- 混合研究法は、実際には研究の実践において長い歴史を持っている。
  - 研究者は方法論者の議論について、問いを解く際の実践的な理由から無視することがある。
  - 著者らはむしろ、方法論者が実践研究者に追いつく必要性を指摘する。
  - 量的研究、質的研究、混合研究法は、それぞれ異なる状況下で優れた研究であり、具体的なコンティンジェンシーを検討し、特定の研究でどの研究アプローチ、またはどの研究アプローチの組み合わせを使用すべきかを決定するのは研究者の仕事である。

- 混合法ムーブメントの進展は、単一の方法に関連する問題のいくつかを軽減する可能性を持っている。
  - 混合法研究の議論の進展がもたらす、最も重要なことは、混合法研究を行う研究者は、研究のベースにある疑問に基づいて方法やアプローチを選択する可能性が高くなるということ。
  - そして、そのようにして量的研究者と質的研究者の間の溝を狭めることで、教育の質のアカウンタビリティを達成するための責任の共有を促進する可能性を持っている。